濱田初次郎氏の卷

—濱田印刷機製造株式會社—

目次

特許王が造つた印刷機「ハマダ」
印刷機研究の傍、齒車工場を設立す
銀行家の投出してくれた十萬圓で印刷機製造に

特許王が造つた印刷機「ハマダ」

特許局の役人達が「此の人は幾百の特許をとれば出願をやめるのであらう」と三嘆これ久しうしたといふ印刷機の特許王。濱田印刷機製造株式會社々長濱田初次郎氏も本年六十四歳になつた。事實、ひと頃の氏の特許出願振りは大變なもので、特許局に提出される月々の出願總件の幾割かを占め、又、特許になつたものも其の月々の總數の幾割かを占めてゐたといふのだから、役人風情を啞然たらしむるには十分であつたに違ひない。

何の學歴もない百姓の小倅が、近代文明の花形たる印刷機にがつちと組みついて三十年、特許數に於て日本一、優秀な性能に於て日本一の印刷機を製造するに至るまでには、文字通り其の苦しみに於ても日本一の歳月を送らねばなら

なかつた彼だが、六十四歳の今日でも、午前七時出社といふ判で押したやうな
矍鑠たる奮闘振りには更に舌を巻かずにはゐられない。
昭和九年に資本金百萬圓の株式に改組してからは、印刷機に於ける「ハマダ」の名は絶對不動のものとして斯界に君臨、オフセットにもグラビヤにも其の他平版凹版の機械にも、往くところ可ならざるなしの盛況を保持してゐる。印刷社にして「ハマダ」の機械を用ひてゐぬ所は、モグリだとまで噂されてゐる今日、彼の奮闘傳を知る事は今後事を成さんとする者にとつて必須の一課目でもあらう。

印刷機研究の旁、齒車工場を設立す

明治十九年の秋、金澤の第九聯隊が石川縣大聖寺の邊で機動演習をやつた時

の事だ。近在の三谷村から友人四、五人と連立つて、勇しくもあり珍しくもある兵隊さんを眺めんものと梅干入のお握りに草鞋ばきといふ出立の少年達があつた。軈て森の彼方から亮々たる集合ラッパの響、駈けつけてみると驚いた。
「あれ、兵隊さんの着物つて黄色なんだよ」
「西洋の着物だ」
見た事のなかつた軍服姿の凛々しさ。それがきちんと整列してゐる集團の美しさ。着物と言へば泥のはね返つた粗末な野良着だけだと思つてゐたのに——。
此の少年達の中に交つてゐた濱田初次郎といふ十一歳の百姓の伜には、其の時以來「西洋の着物」が忘れられなくなつた。冬が來て、友人達はもう兵隊さんの事を話にも出さなくなつたが、彼は縁側で日向ぼつこをしながら靜かに考へてゐた。そして柔い冬の陽に溫もつた彼の頭には、次第に一つの夢が膨らんで行つた。

「さうだ、おらあ、あゝいふ西洋の着物をどん〳〵造り出す偉い人になつて、兵隊さんに喜ばれるようになりたい」

被服製造――、そして紡機織機製造の夢。此の夢は遂に彼をして上京の計畫を立てさせた。中仙道を東へ東へと徒歩で旅する事十七日、東京の或機械工場の徒弟として住み込んだのは、十三歳の時であつた。

所が、住み込んでみて驚いた。徒弟といふからには段々技術の習得でもさせるのかと思つてゐたら、來る日も來る日も子守と走り使ひばかり。尤もかうした數年を辛棒すると、初めて見習職工として工場に出してくれる從來からの習慣ではあつたが、こんな消極生活では宿念の夜學になど何日になつたら通はして貰へるか知れたものではない。

飛出して他の工場へ移り、此處では若干の腕を鍛へる事が出來た。一方、紡機織機の研究を進めた。彼が印刷機械の研究に轉向したのは、兵役生活を終つてからだが、機械といふものゝ基本的な知識は未青年時代の紡機織機の研究に負ふ所が多かつた。機械の操作に對する面白さ、まして製造の興味、改良の痛快さなどを知つた彼はすつかり機械狂の青年になり、彼の部屋には圖面やら模型、はては部分品に至るまで雜然と放り出され、時代が時代だから、

「どうも此の頃のあれの目の色がをかしい」

と心配する者も出て來た。

印刷機械の研究に沒頭し始めた其の頃は、勤務先も其の方面の鐵工所に變へ、毎日二時間位の睡眠きり取らなかつたといふのだから、如何に猛烈な青年研究家であつたかゞ十分に想像出來る。

猛烈――、人はよく其の言葉を知つて實際を體し兼ねてゐる。彼にあつては、まさに其の逆だつた。猛烈に行なつて、併も自分はちつともそれを意識しなかつたのである。特許を出願して、最初にとつた時の喜びと自信。そして次

々と數知れず特許を獲得する毎に、それは次の研究への勵みとなり努力となるのであつた。

「たつた二時間の睡眠時間も惜しい」

いや、一日が三十時間あつてくれたらと幾度それを思つたか知れなかつた。印刷機の部分品の改良は、かうした彼の精力と頭の前には幾百幾千もの新テーマを提供した。現在の「ハマダ」式印刷機が誇る性能の數々は、みな此の時代の所産に外ならぬ。給紙裝置の驚くべき大進歩も印刷速度の高度化も、みんな彼の手が生んだ。

斯くて、「印刷機特許王」の榮譽ある名を以て人々の話題になりかけた頃、彼は働いてゐる鐵工所の工場主の信愛するところとなり、其の女婿となつた。彼が工場主から斯くも愛されるに至つたのは、獨り特許の數々を得た爲ばかりではない。彼は自宅にあつては孜々として倦まざる特許王であつたが、工場に於

ては齒車製造の押しも押されもせぬ名工であつたのである。

鑪の使ひ方に他人の追從を許さぬ技倆を持つ彼の手に、ひと度齒車が觸るれば、斯界の技術家達をして「凄い！」の感極まつた一言を發せずにはおかぬ製品を出した。十を識る者は百に通ずとか、彼は八方美人ではないが、環境の應ずるところ悉く全力を傾けて、夫々の頂上に達せずんば止まずの氣慨を抱いてゐたのである。

こんなわけで、大正六年には現在の龜戸に工場を設立、齒車の製造に着手した。既に女婿としての社會的地位もあつたが、印刷機械製造に乘出すには未だ早しとした。そして大正八年には、歐米の旅に出た。印刷機械工場の視察の爲であつた。

銀行家の投出してくれた十萬圓で印刷機製造に

歐米から歸つた彼は、自分が研究を續け特許に續く無數の特許をとつた印刷機が、決して海外諸國のそれに劣らぬ事を確め得た。腕あり、頭あり、自信あり。然し、こゝに足りないものは金だつた。今にしてしみ〴〵と金の運用の偉きを想つた。

彼位澤山の特許を持つてゐれば、資本家と容易に結ぶ事も出來たが、發明家が資本家と組まずに自力で企業化し得たら、こんな理想郷は又とない。悶々たる中に流れ去る幾日、幾十日――、此の時ひよいと彼の膝下に十萬圓の小切手が轉り込んで來たのだから、彼の持つ信用の力も亦大きいではないか。

それは女婿としてよく工場主を援け、時々取引銀行にも出向いてゐる中に懇意になつた其の銀行の重役が、

「技術に經營にも彼なら間違ひない」

と見込んで、投げ出してくれた十萬圓だつた。海か山かは兎に角やつてみねば判らぬのが事業だ。それを何の疑ひもなく、ポンと借してくれたのだから、濱田氏も大いに感謝し、大正十年、大戰後の不況愈々闇を濃くしつゝあつたに拘らず創業、全馬力を出し切つて闘つたものだ。

創業以來丸二年で有名な九月一日の關東大震災に見舞はれ、あらゆる資材、それこそ研究室の設計圖一枚殘さず、完全に火の海に持つて行かれてしまつた。だが、災難に泣くのは彼一人ではない。市民幾百萬がみんな同じ素裸になつたのである。かういふ時に逸早く雄々しく立上るのが眞の事業家でなければならぬ。彼は古材を求めて早速工場を建て、急ぎ機械を据え、動力の流入に骨折つ

た。そして注文をとる爲に、煙塵と混亂の東京市中を廻り出したのが、何と九月十五日だといふから其の迅速振りには一驚を喫するの外はない。

市内の燒けた印刷所に行つてみると、人々は半壞や燒け爛れた印刷機を前にして呆然自失の狀態にあつた。或印刷所の主人公などは轉業以外に收拾の途なしとまで悲しき決意をしてゐた。これらの人々を慰めながら、念入りに破損した機械を調べ、損害は幾許でもない。勇猛、再起すべき必要を說いた。說かれてみれば相手の氣持も動いてくる。どうせ印刷業で踏み出した一生だ、死ぬも生きるもこれ一つで行かうと、半壞の機械から立上る事になり、斯くて濱田印刷機製造の工場内は修繕機械で山をなした。

それ以後、彼は「迅速」の勝利といふ事を重んじるやうになり、絕えず部分品のストックを倉庫に置くやうにした。修理の依賴があれば、おいそれと應じる事が出來た。事實、印刷業といふ迅速を生命の一つとする仕事では、機械を

迅速に修理してもらふ事がどんなに有難いか知れない。」濱田には何日も部分品が揃つてゐる。だから、濱田は早い」と業界の人々は彼のストック主義に大きい信賴を置いた。これで彼の工場は又ぐんと伸びた。

經營者としての方針や肚も決まる一方では、技術方面の工夫發明も次々と生まれた。發明協會をはじめとして、其の他の種々な團體から受けた表彰は數限りなくある。併も尙、彼は今迄の完成に滿足せずして、印刷機械の大革命を今後に期し、着々と研究の歩を進めてゐるのである。

偖、筆を擱くに當つて彼が現在實施してゐる分工場政策といふものを簡單に解說して、經營者としての彼の名腕の一端を示さう。

彼は謂はゆる熟練工――優秀な技術を獲得した職工には、希望に應じて若干の資本を與へる事にしてゐる。其の資本で彼の分工場を經營させるのである。

分工場に對しては當人の技術の高さと方向とに應じて、部分品製作を註文す

る。分工場を持つた職工は、勢、自主的になるから仕事に勵みも出る。註文もおろそかにしてはならぬと思ふ。

斯くて出來上つた部分品は、彼の本工場で買ひ取つてこれを組立てるのであるが、分工場の職工に餘力があれば、無論、他の方面からの註文に應じても一向に差支へはないのだから、人も技術も完全に活きるといふものだ。現在、これらの分工場は十二の多きを數へ、濱田印刷機製造株式會社の見えざる支柱となつて盡力してゐる。本社の隆盛と共に家の子郎黨の光ある分散を喜びたい。

福山福太郎氏の巻

—福山印刷製本所—

目次

一　唯一の理想は壽司が喰ひたい
蜜柑箱一つで獨立
東京進出と印刷デパート
文化人福山福太郎
二　一に誠實、二に誠實

唯一の理想は壽司が喰ひたい

福山福太郎氏はたゞに東京における印刷製本界の元老たるばかりでなしに、彼の今日まで歩んで來た足跡は日本における斯界發達の一エポックを劃するものであつた。今日印刷製本に依つて生計をいとなんでゐるもので、直接にか間接にか彼の厄介になつてゐないものは、極めて少ない事を以てしても、彼の印刷製本界に對する貢獻の程は窺がひ知られやうといふものである。

彼は徒手空拳、今日を築き上げた文字通り「立志傳中の人」である。彼の父は製本屋であつたから、(但し當時は製本屋といはず、表紙屋といつた。製本屋といふ名前は洋式印刷――バレン式印刷といつた――の輸入されてから明治二十七、八年頃から起つたものである)彼は元來印刷製本に無關係なわけではな

かつたが、その彼も最初から印刷製本に依つて身を立てる樣に運命づけられてゐたわけではない。彼の最初の小僧奉公は、印刷製本屋とは大分緣の遠い藥問屋であつた。

何故製本屋の稼業ををさめないで、全然方面違ひの藥問屋に奉公に行つたかといへば、彼の父の持論として「自分の子供は自分が敎育しては駄目だ。他人の家の飯を喰つて苦しんで來ねば一人前の人間にはなれない」と言つてゐたので、その持論の實踐の意味からであつたのである。かくして、とにかく藥問屋に奉公に行つたが、困つた事には福太郎少年は手におへぬ亂暴者で、そのため顧客關係や朋輩の關係がどうもうまく行かない。幾何もなくして、追出されて父の家に歸されてしまつた。

父もそんな亂暴な子供は、何處へ奉公に出さうと結局同じ事だと思つたものか、その後は二度と他家へ奉公させる樣な事をせず、家において家業たる製本

の手傳ひをやらしてゐた。

所がこの製本といふ仕事は彼の性にあつてゐたらしい。藥問屋の小僧の時には手におへぬ亂暴者の福太郎少年が、製本となるとまるで人間がかはつた樣におとなしくなり、非常に熱心に製本技術を學んだが、幾何もなくして不幸父の死に遭ひ、他の製本屋に奉公に出ることになつた。

この福太郎少年は、父から製本の技術を授けられたが、幸ひな事には當時の職人の通有性たる「宵越の金は使はぬ」といふ職人氣質は受けつがなかつた。他の朋輩が遊んでゐる時でも、彼は一寸の間も惜しい樣にして仕事をした。朋輩達が遊びから歸つて來て、今日の遊びの面白さに就いて雜談放談に花を咲かす時でも彼はその仲間に入らずにじつと仕事の事を考へてゐた。どうすればもつと能率的な製本をする事が出來るだらうか、どうすればもつと立派な製本が出來るであらうか、彼の頭の中はいつもこの事で一杯になつてゐたのである。

そのためには努力せねばならぬ、人の何層倍も努力せねばならぬ——彼は寝てもさめても、こう考へてゐた。

當時の徒弟制度の常として、どんな職業であつても、奉公してすぐには仕事を教へてくれない。雑用や使ひ走り、本業とは直接縁のない仕事を二、三年もやらされて、それから後に仕事を教へてもらふといふ順序になつてゐた。だから、奉公したての福太郎少年も、仕事といへば使ひ走りや、細々とした雑用だけであつたが、彼はどんなつまらない仕事にも厭な顔一つせずに欣々然として働らいた。ある冬の日、彼は素足にわらを巻きつけて（下駄を履いて歩けば、滑つて早く歩けぬからである）大阪の心齋橋を通つた事がある。名だゝる盛り場の事とて、兩側には數多の店舗が軒を並べて、それ〴〵に綺麗にかざり立てて客を惹いてゐる。中でも年の若い、喰ひたい盛りの彼の眼を痛い位射たものは、色とり〴〵に並べられた大阪壽司であつた。

「あゝ、喰べたいなあ、あの壽司を一度に兩手にもつて思ふ存分喰ふて見たいなあ」

彼はしばし自分の用事も忘れて、その大阪壽司に見入つたが、一瞬時ハッとわれに返り、

「そうだ、あの壽司を腹一杯喰へるやうになるためには、ウント働らかねばならぬ、働らいて儲けて、その時はあの壽司を腹一杯喰つてやらう」と彼はわいて來るツバを飲みこみ飲みこみかう固く思つたのである。他日、日本印刷製本界の元老といはれる様になつた彼も、その若い時の唯一の憧がれは大阪壽司を腹一杯喰つて見たいといふ事であつた。

蜜柑箱一つで獨立

彼は腕のいゝところへもつて來て、人の遊ぶ時も遊ばず働らいたので、數年ほどの間に、少しの貯はへも出來たので、その資金をもつて、獨立する事になつたが、何とその時の商賣道具は、小さなミカン箱一つに全部入れられる程わづかなもので、他に商賣に關係のない米櫃だとか、鍋だとかいつた世帶道具が僅かばかりあるにすぎなかつた。文字通り裸一貫キタキリ雀で何もないといつてもいゝ位であつた。時に二十四歳、明治二十四年の春であつた。

このミカン箱一つといふ商賣道具で彼は雄々しくも獨立の第一歩を踏み出したのであるが、主人も小僧も職人も、何もかも自分一人でやるといふいそがしさ、日中は家にゐて頼まれた仕事をし、夜は出來上つた品物をもつて顧客まはりと御用きゝに歩く、往々拾二時を超える時も稀れではなかつた。

彼は考へた――、

普通の人間と同じ事をしてゐたら何時までたつても大して殘らない。普通の

人間のやる二倍の仕事をやれば、一人前分の報酬は使つてしまつたとしても、まだ一人前分だけの報酬はマル〳〵殘るはづだ。ヨシこれからは他人の二倍分の仕事をする樣にしてやらう。

彼は實際において、文字通り實行した。朝はまだまつくらな中から起きた。夜は十二時近くまで仕事をした。ねむる時間といへばホンのわづかなもので、近しいものはそんなに無理に働らいて、もし身體でもこはしたらどうすると、忠告する事も往々あつたが、彼はその厚意には謝しても、その言に從がはうとは思はなかつた。

「俺は信念で働らいてゐる。信念で働いてゐるものが病氣などする事があるものか」

彼は固くさう信じてゐるかと見えた。

その中に、金港堂大阪支店の仕事を引きうける樣になつた。それはとりも直

さず、彼の仕事の仕つ振りが認められたからに外ならない。

一にも誠意、二にも誠意、「誠意」といふ事が彼の仕事を一貫する根本精神だ。彼はかつて約束の期日をおくらした事が一ぺんもない。早くて仕事がキレイでしかも確實だ。これがみとめられぬはづはない、彼はこの金港堂の仕事をしたおかげで、金港堂にも儲けさしたが、彼自身もこれに依つて少なからぬ財を蓄へる事が出來た。

かくして大阪における彼の印刷製本界における地位は次第に大きなものとなつた。それは凡て彼の誠意と勤勞と努力によつて築き上げたものである。

かうして大阪における仕事が、相當の段階まで漕ぎつけたと見るや、彼は年來の宿願たる東京進出を目論む事になつた。東京は日本の文化の中心地だ。大阪で少しばかり成功したところで、そんな事でいゝ氣になつてはをられない。東京へ打つて出て成功したんでなければ本當の成功とはいへない。

彼はかう考へて、是非とも東京へ進出しやうと考へ、まづその手はじめとして、大阪から見て幾分たりとも東京に近い京都に印刷工場を設けた。そしてそれがある程度成功したと見るや、次には靜岡へ進出した。その靜岡の工場が物になつたと見るとはじめて東京に出て來た。三段飛びともいふべき進出方法である。

こゝに福山福太郎の特徴がある。大抵の人間は東京進出を志ざすと、庶二無二、東京へ飛び出して來る。西も東もわからない、知己友人もまるでゐない全然知らぬ土地へ、ヒヨコリと飛び出して來て中々うまく行くはづはない。千に一つ、まぐれあたりでうまく行くものがあつても、殘り九百九十九は、大抵駄目になつてしまふ。そして雄圖むなしく中途で挫折し、またトボ〳〵と錦ならぬボロをかざつて故郷の地へもどるものが少なくないのである。

彼はその點きはめて愼重であつた。どこまでも手堅くどこまでも確實に、虎

の迅速さはなくとも牛の歩みの確實さでもつて、歩一歩とその目標に近づいて行つたのである。

東京進出と印刷デパート

彼が東京へ出てはじめて工場を設けたのは、明治四十三年の事で、現在帝國地方行政學會の西五軒町工場が、その前身であつた。彼の東京に建てた最初の工場が現在帝國地方行政學會の工場になつてゐるといふ經緯は、因緣淺からぬものがある。當時行政學會の主宰者は大谷仁兵衞氏であつたが、氏は例の加除自在の法令全集の刊行を計劃し、大いにその眞價を天下に問はんとしてゐた。加除式の法令集は、今日はどこにもあり、人はその便利に慣れて、さして珍らしいと思はなくなつたが、當時にあつては、それは劃期的の試ろみであつた。

ところでこゝに厄介な事には當時は製本技術が非常に幼稚で、この加除式の法令集の製本の出來るものがない。今の人が聞いたらおそらく信じないかも知れないが、當時の製本界の發達狀態は、しかく幼稚きはまるものであつた。

これには大谷もホト〳〵困却してしまつた。福山福太郎は大谷在阪當時、微力の彼の製本を引受け、共に難業して大谷の今日をあらしむるに力を添へた因緣があるため大谷は福山の力を深く信じて、其の協力を求め玆に大谷、福山のコンビが出來た次第である。

それではといふので大谷はその加除式法令集の製本を福山に賴む事になつたが、彼は大谷が特に自分を見込んで依囑して吳れた事に對して深くその知遇に感じ、寢食も忘れてその研究に沒頭し、つひに首尾よくその研究を完成して、大谷の依囑を果たしたわけである。

大谷はこのことあつて以來、彼を深く信賴し、福山の經營する印刷製本所を

自己專屬の工場となし將來の發展の爲め福山の手腕に恃たんと何くれとなく彼に意見をきいて事を決める樣になつた。

當時の彼の活動振りはほとんど超人的ともいふべきもので、たとへばその一端を記せば朝四時におきると、まづスッ裸となる。それは春夏秋冬を問ふことがない。スッ裸の辯として彼の曰く、

「着物があつては仕事の邪魔だ。寒い時はそれだけ一生懸命に働らけば、ひとりでに溫かくなる」——洵に徹底したものである。

七時に朝飯を食ふが、その時はじめて着物を着て、職人連中が仕事をはじめる頃得意まはりや、御用聞きに出掛け、一日飛びまはつて、夕方歸宅する。歸宅して夕飯を食ふと又々猛烈に働らきつゞけ、拾二時近くまで働らく。寢に就くのは一時近くであるが、そのため就眠時間は一日三時間內外にすぎない。ナポレオンは一日四時間しか眠らなかつたさうだが、彼はナポレオンよりも一時

間睡眠時間が少なかつた。

當時は東京工場の外に、靜岡にも京都にも、旗上げの地大阪にも夫々まだ工場があり、それを一々見廻らねばならなかつたので、そのいそがはしさといつたら、本當に眼がまはる樣な有樣だつた。

彼の夫人は、當時の彼の働らき振りを記念するために、彼が當時着てゐた洋服を今もつて保存されてゐるが、その洋服たるや文目もしかと解らぬ程くたびれた代物で、その背中に當る部分には、大きく汗の跡がしみついてゐる。彼はこの洋服をたゞの一枚、二十年間着て活動しつゞけたのである。それを見ると、何人も如何に彼が刻苦精勵したかを思つて、無量の感慨が湧くのを禁じ得ない。

話が些か前後するが彼が東京に進出したに就いては、たゞ漫然と東京に來て仕事をするために來たのではない。

現在でこそ大部分の印刷所は、組版、印刷、製本を三位一體としてやつてゐ

るが、福山が東京に進出して來た頃は組版、印刷、製本がバラ〳〵に分かれてをり、そのため顧客は隨分不便を感じてゐたものである。彼は夙にこれは是非とも改良せねばならぬと考へて、東京進出を機として、これを單一の經營下に移し、いはゞ印刷のデパートをつくりたい意向であつた。現在共同、大日本、山縣等の大印刷會社は殆ど右の印刷のデパート式經營をやつてゐるが、もとはといへば福山福太郎がはじめて創始したものである。現在でも個人經營のデパート式經營においては、福山印刷製本所の右に出るものはない。

文化人福山福太郎

大正十二年の關東大震災は、帝都の大半をあげて烏有に歸せしめた。彼が關係してゐた帝國地方行政學會の工場も、亦、餘燼を喰らつて一片の灰土と化する

の已むなきに至つた。工場がなくなつたといつても仕事はやめておられない。大谷仁兵衛は福山の俠氣にすがるべく、彼をたづねて事情を打ちあけ、更生を頼みこんだ。感激性の彼は、即座に西五軒町の工場をあげて行政學會の工場とする事を約し、自分みづから工場支配人の椅子を引き受け、大谷を扶けて灰燼の中から更生の第一歩を踏み出した。

だが大正末期の頽廢した世相は、必然に職人の中にも浸み込んでをり、「仕事第一主義」で叩き上げ、「人の二倍も働らく」事を信條として來た彼の考へ方と必らずしもそぐはぬものがあつた。職人の働き振りを見て、

「世の中も隨分變つたものだ。昔の様な職人はゐない」と流石に彼は長嘆久しうしたのであるが、遂ひに意を決して西五軒町工場支配人を退ぞき、本來の自分の行き方を生かすべく、現在の牛込區西五軒町三四に、福山印刷製本所を建て、それから後は鋭意これを盛り立てる事に力を注いで來た。

その中、例の改造社の「日本文學全集」をトップとする大圓本時代がやつて來た。彼は改造社其の他の仕事を引受け、相かはらず迅速、正確、叮嚀のモットーに依り、顧客の感謝を博したが、一方印刷物のインフレのため、製本職人が拂底し大恐慌を來たした。彼は業界の窮狀見るにしのびずとし、自費を投じて盛に製本職人の養成につとめ、そのおかげで我國の製本界は、どれだけ苦境を緩和されたか知れない。且つ彼に養成されたお蔭で、後、獨立して製本屋の看板を掲げ、その日その日を、感謝して過してゐるものの數は夥だしいものである。

又、かつて臺灣において文化政策振興のため内地の印刷製本技術を移植する計劃を樹てた時、特に招かれて諮問せられたのは彼であつた。彼は臺灣の文化政策の重大性に鑑み、これはあらゆる犧牲において期待に添はねばならぬと考へ、相當の負擔を覺悟の上で二十人程の職人を養成して彼地におくつてやつた。

このためそれ以來臺灣においても印刷製本技術が急速に發展する樣になつたが、その基をつくつたものは外ならぬ彼であつた。

更に彼は現在美術書出版書肆として知られてゐるアトリエ社の社主をしてゐるが、彼がアトリエ社に關係する樣になつたといふのは、藝術の國民精神の上に與へる影響を考へての故であつた。卽ち、美術書の出版といふことは、文化の發達上極めて重要事だ。だが美術書出版は相當危險の多い仕事で、中々これをやらうとするものがない。アトリエ社は敢てその難事業に當らうとした。これは何をおいても援助してやらねばならぬといつて、印刷製本を通じて今日までアトリエ社に投資した額は三十數萬圓に達してゐる。その中アトリエ社が收支償なはなくなつて、全部をあげて彼に委囑する樣になつたが、彼がアトリエ社の經營をしてゐるのはそんな經緯からであるがこゝいら邊は彼が決して一介の印刷屋の主人でない事を示して餘りあるものである。

一に誠實、二に誠實

彼はお世辭や愛嬌や、其の場限りのチャランポランを一切いはない。話すことがなければ默つてゐるといふ風である。だから、彼に初めて會つたものは、恐ろしく頑固な、人情の機微など到底解しさうもない男だと思ひ込む。

だがそれは極はめて皮相な觀察にすぎない。彼の本質は極はめて人情にあつい。自分の懷に飛び込むものは、どこまでも面倒を見てやるといつた俠氣のある男である。たゞ彼は理窟の通らぬ事が極端にきらひで其の場限りのことを言つて一時を胡魔化したり、それとなく愛想のいゝ事を言つて、人の御機嫌をとるといふ樣な事を自分で一切しないばかりでなく、他の人間がさうする事も好まないのである。彼はいふ、

「私は人間はたれでも誠實でなければならないと思つてゐる。福山福太郎は口も下手だし文章も書けないけれども、「誠實」といふ點については未だかへり見てやましかつた事は一度もない。大した事はないが、現在は幾何かの財も出來、人からも成功者といはれる程になつたのも根本は自分が誠實であつたからだと思つてゐる。

たゞ現在は統制や其の他で印刷製本界が行きづまつて來たといふ樣な事がいはれてゐる。若し私の全財産を抛つて、その行きづまりが打開されるものならば自分はいつでもよろこんで自分の財産を投出すつもりでゐる！」

彼は單なる金儲け第一主義の印刷屋ではない。常に何物か金錢を超えた理想のために働らいてゐるのである。だから彼は自分が投資した事業がたとへ不成功にをはつても、それをトヤカク言つた事が一度もない。理窟のとほらぬ事をすれば憤激するが、そうでなければ事の成否に就いては一言の小面倒くさい事

をいはぬ。

彼は自分の受けた恩はどれ程小さい事でも忘れずに必らずこれに報ひ、又、一度自分が面倒を見てやつたものに對してはどこまでもつゞいて何くれと心配してやる。

こういふ話がある。

彼はこれといつて趣味はない。仕事そのものが趣味といへば趣味といへるだらう。彼は印刷機械の音を聞かないと何となく面白くない。心さびしくてやり切れぬと言つてゐる。正に物心一如ともいふべき境地にあるのである。

當世は、小悧巧な才子ばかりが巾をきかして、福山の様な本當に氣骨のある人間らしい人間が少なくなつてゐる。輕薄浮草な世相に對して、彼の如きは正に一服の清凉劑以上のものであらう。

蒔田鐵司氏の巻

——日本内燃機株式會社——

目次

國産自動車工業確立の歴史に光る人
獨立して七轉八倒の中に研究を進める
國産自動三輪車及び軍用サイドカーを完成す

國産自動車工業確立の歴史上に光る人

オートバイやオート三輪が街路を疾驅するやうになつてから何年になるであらう。運搬機關又は交通機關として自轉車を遙かに凌駕する性能を備へ、小型で利便に富めるこれ以上のものは無い。軍用に商用に其の需要が日に增してゐるのも宜なる事である。

偖、人は惠みが大き過ぎすると其の惠みを忘れがちのものである。オートバイやオート三輪の惠みを太陽や水のそれと同列だとするものではないが、其の國産化に一生を捧げ、殊に内燃機關の製造に於て先覺者としての果てしない努力と苦心を續けた人を知る事は決して意義低しとはしないだらう。

彼は多くの立志傳に見られるやうに、學歴が無くはない。今の工大の前身、

藏前高工を卒業してゐるから、其の點は先つ順調に進んでゐると言はねばならぬ。然し、ひと度實社會に突出されるや、無資本と大いなる希望とのギャップに挾撃され、自分が漸く小工場を持てたかと思ふと直ぐに他人の工場の一技術家に轉落せねばならぬ等の苦しみを幾度か繰返した。

其の間にコツ〳〵と製造し上げた國産内燃機關の素晴しさ。それはオートバイやオート三輪、又は軍用サイドカーの國産化となり、國産自動車工業確立の歴史に燦として輝く一頁を殘してゐる。此の内燃機關王は今や報いられて資本金五百萬圓の日本内燃機株式會社常務取締役の地位にある蒔田鐵司氏である。

獨立して七轉八倒の中に研究を進める

刀匠宗近の後裔として彼は靜岡縣の農鍛冶屋に生まれた。十九歳に上京して

順天中學の四年に編入するまでは、主として生家で育つた。だから農鍛冶の實際は朝夕見ても來たし、又槌を取つて鐵を打つた事もあつた。

家業が不服――といふわけではないが、同じ鍛冶商賣でももう少し近代化された組織の中で働いてみたかつた。つまり、傳統が授けてくれる腕とかコツとかいふものゝ外に、それを裏づけてくれる學問に觸れたかつたのである。そこで縣下の某鐵工所に職工として入社した事もあつた。が、規模が大きいといふだけの事で少年の知識欲を滿足させてくれるだけの目新しいものもなかつたので、半年程で田舍に歸つた。

其の後は從順に家業を手傳ひ、刀なども打つた。十七、八になると小學校友達はえてして小生意氣になり、煙草などをふかして向學心から遠ざかつて行つた。

「かういふ環境の中にゐてはいけない」

兩親を説き上京したのは十九の時であつた。子の意志も強かつたが、親も亦強かつた。中學卒業後は子の希望を容れて、藏前高工に入學させた。食ふものも食はずに懸命に鍛冶を打つて子の學資を滯りなく送つてくれたのである。彼が今日、故郷に殘つてゐる一人の母親の爲に、多忙な時間を割いて時折出掛けては何かと孝養を盡し、社員間に美しい其の情を讃へられてゐるのも、かゝる親なればこそであつた。

藏前在學中から彼は工場に出入して實地に觸れる事が好きであつた。折よく、同郷人の豐川といふ兄弟が巣鴨に白揚社を經營してゐた。彼は依頼されて工場舍監となり、技術指導をも兼ねて得々たるものがあつた。「金ぼたんの若い舍監先生」は職工からも受けが好かつた。職工と一緒に菜つ葉服を着込んで何でもやつた。今日の彼の頑張りと其の反面の人情脆さは斯かる集團生活の一員として世間の裏表をよく見て來た事に胎胚する。

卒業後、正式に工場入りをした最初は千住の日本製靴だつた。が、日頃機械工業に希望を持ち又其の方面の經驗を多少なりとも持つてゐた彼は、到底職を此處に定める心算は無かつた。大正七年、三十一歳に至つて大飛躍を試るべく、獨立して本郷に小つぽけな工場を建てた。七轉び八起きの彼の苦闘は、此の時から初まつた。

「純國産のオート三輪車を造りたい」

それが彼のひそかに抱いてゐた光輝ある最大の念願だつた。最も重要な内燃機は無論の事、其の他の部分品も大方は輸入品であつた。何の發明も創造もせずに生命を終るとしたならば、技術家としてこんなに大きい恥辱は又とあるだらうか。どんな犧牲を拂つても此の國産化を完成させなければならないと考へた。

そこで本郷の工場では先づ、自轉車のフリーホイルの製作をやつた。これも

輸入品であつたのでどの程度に自分の技術が高いかを試してみる爲に、其の國産化に着手したのである。所が、翌年は大正八年のガラがやつて來た。涙を呑んで閉鎖し、學生時代から緣故のある白揚社入りとなつた。

出鼻を挫かれた觀のある所に、重ねて辛苦が襲つて來た。それは白揚社そのものゝ經營が不振に傾いてきた事だ。白揚社での彼は其の間、小型自動車オートモ號などを出し、年來の希望である內燃機の研究を着々と續けて來たので、白揚社の經營不能が殘念で堪らない。然し、止むを得ないので退社して瓢然と世の荒波の中に出た。

瓢然と——だが、歸るべき溫い巢は廣い世界に一つきりない事を彼は知つてゐた。それは慘めなボロ〳〵の巢であつた。然し、彼の今後を本當に育て上げてくれるものは、其處以外には無かつた。足は自然と其處に向かつてゐた。本鄕のもとの古い工場であつた。

國產自動三輪車及び軍用サイドカーを完成す

本鄕の古工場に再度立籠つた彼は、オート三輪車製造の核心に向かつて一路直進した。近く出來上る製品に「ニューエラ」と命名までして一年餘りの苦勞を續けた。然し、何を言つても事業の大きさに對して資本は餘りに少な過ぎた。

「又、行詰つてしまつたよ」

工場の一黨を前にして腕を撫す外はなかつた。そこで止むを得ず、日本自動車に入社したのが昭和三年の一月だつた。

然し、一度火を點じた大野心は少しばかりの風雨の前に消される事はなかつた。囊中の錐遂に囊を通すといふ環境と時代の魔の神が如何に次々と迂廻を命じても、彼は平然と迂廻のまゝになほ目的地に急ぎつゝあつた。

彼は日本自動車の溜池工場に居を移した。此處では先づ純國産オートバイを必ず製造してみせるぞと決めた。然し、自分の工場と違ひ、設備も完全ではないし、それに何よりも自由に事をやるのには氣兼ねがあつた。シリンダー其の他の鑄物は本所の實科工業學校に依頼した。本郷工場で造つておいたフレーム廻りの品物は其の儘持つて來て使ふ事にした。夜に日を繼いで闘つた。外に對して柔の彼は、内には實に剛であつた。單氣筩二衝程二五〇CC機關も完成し、遂に純國産オートバイ三臺を得たのである。

製品は博覧會に出品して大いに認められる所となつた。そこで昭和三年の春、日本自動車では大森に工場を新設し、本郷の古工場の機械類も移して、彼を其の主任とした。機會至れりと小躍りした。早速、嘗て本郷工場で涙を呑んだ「ニューエラ」オート三輪の完成に取掛つた。

仕事は順調に進んだ。昭和四年、彼は既に四十二歳を迎へた。斯くて獨立以

來十二年目にして宿望の「ニューエラ」號は成り、オート三輪の最初の國産化は凱歌を奏した。殊に彼の手に成る内燃機の優秀性は斯界工業者の驚異とされた。

翌昭和五年、續いて小型自動車の五〇〇CC機關を完成し彼の信望は愈々高まつたが、同年軍用サイドカーの試作を日本自動車の石澤社長から命じられた時には、彼の一面を知るに足る痛快な挿話がある。

彼は最初に從來の軍用サイドカーの缺陷を愼重に調べ上げて、製造に着手獨逸陸軍で用ひてゐたBMWのやうな型式のもので、馬力の極めて凄いものを造り上げた時は昭和六年の夏だつた。さて、試運轉の日が來たが、折惡く彼は慢性腸加答兒からひどい下痢を起してゐた。こんな調子では疾走の途々にサイドカーを何度も止めて用を足さねばならぬ事になる。側の者が心配をして試運轉の日を延ばしては如何かと奬めたが、完成はしたものゝ妙に心配であつた。彼

はてんで耳を藉さない。得意のニューエラも引連れ、下腹に晒一反を固く卷きつけて出發した。

サイドカーは爆音も順調に大森工場から碓氷峠を越え、更に和田峠から甲府、富士驛を經て東北道を箱根越しに走りに走つた。此の間三泊四日、氏の下痢を氣遣つて顏色をうかゞふが、一向に停車を命じない。東京に歸り着いた時、側の者がお腹の工合を訊ねると、「さうさう、出發する時はひどかつたんだつたね。忘れてしまつたよ」ケロリと治つてしまつてゐたといふ。

日本自動車を退いて大森工場を二十五萬圓の日本內燃機として創立したのは昭和七年九月だつた。次々と增資してゐる中、五年後には今次事變となつて、軍需急增し今の蒲田に工場を設け、大森工場と共に軍の管理工場として活躍する事になつた。同時に資本も五百萬圓になつた。

日本內燃機は資本系統から言へば寺田財閥に屬してゐるので、會長には寺田

甚吉氏、專務に又木周夫氏を据えてゐるが、切り盛り一切は生みの親蒔田氏が當つてゐる。僅々六、七年で二十五萬圓から其の二十倍に大膨脹した本社は、これから青春の羽搏きをしようとするところである。老いて愈々盛んなる五十四歳の蒔田常務と共に——。

松岡直治郎氏の卷

——株式會社　松直商店——

一目　呆れさせた背負ひ屋さん
六　日本人向きのズボン釣り
一一　「根」が成功の礎

呆れさせた背負ひ屋さん

「今日は、毎度有難うございます、洋品雑貨の松直ですが、いかゞでございませう、見て頂けませんでせうか」

店端で火鉢を抱いて講談本を讀んでゐた唐物屋の親爺が、物臭さうに顔をむけると、あゝ又來たか、三度も無駄足を運んだ洋品の背負ひ屋が立つて居る。

「おや、又お出でだね、よくも倦きずに、お前さんは足まめだね」半ば呆れ半ば感心してしまつた。うちじや仕入先が古くから決つて居るのだからと、何度斷つても斯うしてやつて來なさる、察するに御得意らしい得意のない行商だらう。大風呂敷に一杯、歳が若いから擔げるものゝ、どうせ碌なものは持つて來まい。だが安けりや買つてやらぬでもない——「どうれ、ぢや一ぺん見てあげや

う、出して御覧」と親爺が煙管をポンと椽へたゝく。

二十歳の青年はにこりと笑つた。丁寧にお叩頭頭をしていそいそと紐を解いた。この店へは三度目だ、三度とも木で鼻をくゝつたやうな挨拶だつた。しかも意地の悪さうな眼つきで頭のてつぺんから足のさきまで見下ろしたものだつた、それが「足まめ」を承認してくれた、その上、品物を見やうといふ。

明治三十五、六年のことである。松直青年はこの調子で一軒一軒新らしいお得意を増やして行つた。「あんな店へ、もう二度と行くものか」とふと呟く店があつても、直ぐ思ひ返した。努力が足らん、誠が通じないのだ、嫌な店ほど餘計に努めねばならぬ、さう意氣込んだものである。

明治二十九年、十三歳の秋、半歳を雪に埋もれる新潟縣中頸城郡の一小村を後に東京へ出た彼は、空樽屋を淺草で營んで居た祖父を頼りそこで半年ばかり車の後押しなどをして手傳つてゐたが、傳手を求めてさる唐物屋へ小僧奉公に

入つた。處がその店が五六年にして破産してしまひ、大枚二十圓の手當が支給された。彼は世の中へ一人突出されたがどうせこの僅かな資本では大きな商賣は出來る筈がない。幸ひ習ひ覺えた商賣で、洋品雜貨の行商をすることにした。そこで斯うして勤勉力行の修業が始まつたのである。

健康と精勤が何よりの資本である、誠實と信用は元手である。彼は之らを實踐に移した。「買つた物は現金で拂う」これが主義であつた。だから足まめ小まめに廣く多く賣り、利は忍べるだけ薄くして、集めた金はその足で次の商品に換えた。

財布の中からじやら〳〵と出てくる集めた許りの細かい金、それは如何にも慘めな行商の内容を語つてゐたが、問屋はそこに彼の誠實を認め、段々融通をきかせてくれることになつた。卽ち信用がいよいよ加重してきたのであつた。

着のみ着のまゝ、健康と精勤が資本であつた若き行商——谷渡りズボン釣と

ヨット鉛筆で夫々斯界に君臨する松直商店主松岡直治郎氏の若い姿である。

日本人向きのズボン釣り

行商をして居る中に、唐物のガーターやズボン釣りについて色々な批評を度々耳にした。色が派手過ぎるとか、圖柄が大まかだとか、意匠が悪いとか、又ズボン釣りの又の部分が破れ易いとか。不平や註文は一々尤もなことであつた。

抑もが輸入品なのである、それを問屋から受けてそのまゝ取次いで居るに過ぎぬ。日本人にぴつたり適はぬのは無理もない。そこで日本人向きのものを考案し、製造したならばキツト喜ばれるに違ひないし又賣れるにきまつて居ると氣がついた。

折しも明治の文化は歐風讃仰から生活の様式にも及び、洋服の着用はもはや一般化に進まんとしつゝあつた。ガーターやズボン釣りは國民生活上なくてはならぬものになつてくる、その製造を始めるのは今こそ時機だ——慧眼なる青年松直さんは斯く見拔いた。

明治三十九年正月、二十三歳の春を迎へるや、淺草瓦町に小さな家を借り、足で貯めた血の出るやうな金をミシン四臺に換えた。

カタタタ……カタタ……と機械の音が響きが彼の手を心臓をゆさぶつた、物を造ることの何と愉しいものであることよ。

かくてガーターやズボン釣りの製造が二三の男女工に彼自らも加つて始まつたのであるが、彼には尙材料の仕入、製品の賣込みの仕事があつた。つまり二人分も三人分も働いたのである。健康と精勤が何よりの資本といふ覺悟は益々發揚されたのである。

「さて自家の品にどんな商標がよからう」と、考へ好きの彼は日夜苦心したが、何よりも先づ商標を見たらすぐその品質が判るものにしやう。そこで「谷渡り人物」印を選んだ。全く彼の製品の良心的である事を具體化した商標で、たとへ兩端を吊つたその上を人が綱渡りしても大丈夫だとの意味である。亦それだけ自信のある商品を製つて居るのである。

それから約十年、苦心經營の甲斐あつて大正三年には日本橋馬喰町に店舗を構へ、いよ〳〵伸張期へ入つたが折しも世界大戰が勃發し、舶來品の杜絶に邦品の海外進出といつた一般情勢に均霑し、今迄の工場と設備だけではとても註文に應じきれなくなり、大正九年現在の澁谷猿樂町に規模をさらに大きく工場を建てたのであるが、新工場ではズボン釣り其他の部分品一切を自家供給するやうに目論んだ。

ところが第何回目の試練が待受けて居やうとは神ならぬ身の知るべくも無い、周到なる用意の下に取かゝつた新事業が圖らざる難關に打當つたのである。一年目二年目は缺損が續き三年經つても四年しても好轉しなかつた。

しかし非凡の彼がそこで投げ出したりはしない、こゝが根の大事なところだ亦好轉する迄やらねば止まぬと、總ゆる智を絞り命を懸けて奮闘した。普通人であつたなら疾うに投げだしたであらうに、彼は倦くまでも勇しく戰つたのである。

「根」が成功の礎

もう明日は工場を閉ぢやう、それを思つて寢に就くが、朝日を拜むとよしもう一馬力だと誓つた。太陽は彼を激勵した。

暗く長かつた四年の星霜、それを閲して漸く成功の緒についた。事業はどう

やら軌道に乘つたのである。長かりし試練期！それを踏越えたゞけに彼の人物と事業は渾然一體となつたのみか、輝かしき大飛躍へ轉じたのである。

さて、一代の奮闘兒松岡直治郎氏を語るに以上の如き簡單な記述で足るとは誰も思はないであらう。といつて細述したからとて以てその儘を諸君が套襲することは無意味である。史を讀む者は記述よりも事實を見ることが肝要である。そこで語り來つた彼が成功の裏に何が秘むかを諸君は覺られたい。

大きなる荷を背負うた彼、製造家としての彼、彼のいづれの方面をみるにせよ、嚴然とわれらの前に現はれるものは、精勤と誠實と而して「根のよさ」である。

「學問も無かつた、財もなかつた、背景もなかつた私であるが、今日あるをうるは私に異常な根のよさが有つたからです」と氏が洩らす。實業界に雄飛せんとする諸君が大いに味うべき言葉であり、銘すべき金言である。

尙氏についてはもう一つ記述すべき事業がある。大正九年友人經營にかゝる鉛筆製造工場が不振に陷り、應援して居た彼が出馬せざるを得ぬことになつた。何しろ五年間も缺損を續けた跡であつた。

彼は順調に發展しだしたズボン釣りの本城を愛弟に委せ、自分は鉛筆工場へ詰切ることにした。何とかして更生させねばならぬ、否更生させずに措くものか。

全く方面違ひの事業ではあるが、彼の負けじ魂と商才とは、やがてこの赤字續きの工場を物の見事にぐんぐん改善して行つた。製產工程に販賣に、思切つた進歩的な方策を施したものである。無論、物と人と金と體驗をどしどし注入したゞけではない、古い昔を蘇らせて彼自らが文房具店を訪ね廻つた。

その奮闘の甲斐あつて、ヨット鉛筆——それが彼の鉛筆なのである——の成績はみるみる擧り、目黑の工場だけでは手狹となり昭和七年には川口市に大工

場を建てるやうになつた。そしてこゝにもズボン釣りと同じ精神が流れ、卽ち芯の製造から素材の加工處理、鉛筆への道程と、材料の製造から完製品へまで自給自足が行はれて居るのである。

かくて今や、わが松岡直治郎氏は株式會社松直商店とヨット鉛筆株式會社の兩社長を兼ね統べて居られるが、ズボン釣り其他の洋品雜貨に於ては品質の精良と廉價を以て知られ、年產百數十萬圓、聲譽販路の廣きこと內地は申すまでもなく遠く海外にまで及び、名實ともに東洋第一を誇り、鉛筆に於ては日本五大鉛筆工場の一としてこれ亦海外にまで遍く雄飛する有樣で、從業員五百名を越えて居る。しかも、成功して金が出來て社長を二つも勤めるとも、それで納まつてしまう、そんなありふれた人間ではない。彼には倦むといふ事がない、ジッとして居る事は出來ない。徹頭徹尾精勤で、骨の髓まで商魂がしみこむで居るから、現在でも尙、昔と變らず忙しく立働いて居る。

屋代勝氏の巻

—金剛自動車商會—
—金剛製作所—
—金剛公司—

一日　三十九歳で百萬圓
　　ダイアモンド自動車の販賣權を握る
一次　「誠實」がものを言つて百臺の註文

三十九歳で百萬圓

「酒は涙か溜息か」のうだつの上がらぬサラリーマンに潔く袂別して、遂に百萬圓の資産家となつた青年自動車王、屋代勝氏が金剛自動車商會主として、檜舞臺に出るまでには、こゝにも亦立志傳中の人に見られがちの涙の滲むやうな苦闘秘話が綴られてゐる。

獨立不羈、勇往邁進の氣象に富む彼も、身の廻りの品々を賣り拂つて生活費に充てねばならぬ事も再三ではなく、或時には大學時代のボートレースで貰つた「青春の紀念品」金の優勝メダルさへ賣つてしまつた。夫の苦しみを見るに見兼ねた彼の愛妻は、風呂屋の湯代までひそかに節約して、夫の成功を日夜神佛かけて祈つた事もあるといふ。

斯くて半死半生の九年間、今では東京本社の外に大阪、上海、天津、奉天、北京にも支店を設け、國内のみならず、新秩序の威容着々と成る支那大陸にも販賣網を擴げ、一方、東京の金剛製作所では本春、新たに郊外に敷地二萬坪の大工場を建設して直接自動車並部品の製造に當り、奉天に資本金百萬圓の株式會社金剛製作所を創立し、驚異的大飛躍を遂げ、四十歳の今日百萬圓を作つた彼が、今後更にどれ程大きくなるかと、あいた口が塞がらぬ位の驀進振りだ。

然し、一時は苦しみに苦しみ拔いた彼には、今日の此の榮華を當然齎すべき、二つの大きい要素が早くからあつた。

その一つは——。

ダイアアンド自動車の販賣權を握る

屋代勝氏の巻

その一つは、人の目の着けてゐなかつた新規の仕事を選んだ事だ。こんな事はおよそ仕事を始めようとする者の「いろは」以前の常識事であるが、現實の上では仲々至難なのである。卽ち、彼は渡米してシカゴの有名なダイアモンド社と契約し、ダイアモンド自動車の日本に於ける販賣權を掴んだ。これは競爭相手のない日本では素晴しい利權だつた。此の利權を大切に育てれば成功は火よりも明かである。

ところで、彼が渡米した本來の理由といふのは、ダイアモンド社に行く爲ではなかつた。彼は早稻田大學の商科を出、二十四歳で名古屋商工會議所の一介のサラリーマンとなつた。五尺九寸五分、體重二十三貫の偉丈夫は蚤の糞のやうなサラリーマンの生活に常々滿たし切れぬものを抱いてゐた所に、商品見本市を研究する爲北米出張の命を受けた。勇躍出帆、研究の餘暇にダイアモンド社の利權を獲得して歸國したのである。

お土産にしては餘りに大きいものを脊負ひ込んで歸つてきたものではあつた。微々たるサラリーマンの悲しさ、歸つては來ても利權を活かす金がない。愚圖々々してゐれば、契約取消しとなる虞れもある。友人、先輩、知人、親戚と駈けずり廻つた。事實を訴へた。そこで集つた金が十萬圓。これを資本金として東海モーター商會といふ合資會社を創つた。時に三十歳の正月であつた。こゝまで事が進めば何をか汲々としてサラリーマンの椅子を護る必要があらうか。江戸つ兒の彼は、さらりと商工會議所勤務をやめた。

ダイアモンド自動車を輸入して販賣を初めた。所が、これが大みそに終つた。といふのは、何分にも踏出したばかりの事とて武士の商法だ。賣掛金が溜る一方の所に、惡ブローカーの魔手が延びてきたりして、滿二年後には金庫の中がカラッポになつてしまつた。出資した人々はもうこれ以上の損をしたくないので、みんな手を引いた。

屋代勝氏の巻

「サラリーマンでゐれば小さいながらも安定した生活が出來たのに、つまらぬ欲を出して乞食になつた」

さう言はれるのが、口惜しかつた。獨り東京支店に立籠つて、二十三貫の巨軀を此の目前の大混亂にぶッつけてみようと決心した。

青息吐息の赤字商人の群の中の一人となつた彼は、然し軈ては當然息を吹返すべき要素を持つてゐた。それは「誠實」であつた。苦しまぎれにも卑怯な事はしない。人の弱點につけ込んであらぬ儲けをするやうな事には耳を藉さない。何處までも正しい誠實を以て自分の仕事の伸長を圖つて行くといふ信念を持つ彼であつた。これが彼を今日あらしめた第二の要素である。

「誠實」がものを言つて百臺の註文

學生時代に涙を呑んで戰つて貰つた優勝メダルを、又涙を呑んで金に代へたのも此の頃の事だつた。支店に共に殘つて働いてくれてゐる人達に、月々きちんと給料を支拂ふ事だけは缺かしたくなかつたのである。いや、こんな誠實を彼の誠實の中に入れては恥しいかも知れない。何となれば、彼は次に語るやうな大損をしてまで誠實を守り通した青年であつたから。

それは久しぶりで東京乘合に二臺の自動車を賣込む契約が出來た時の事だつた。或商會からこれを仕入れて納める事にしてゐたが、いざ搬納といふ時に至つて相手の約束ががらりと變り、此の二臺を賣れば彼が三千圓を損するといふ結末になつてしまつた。彼は齒軋りをした。東京乘合との契約を取消してもらふより外はない。それこそ身の廻りの物まで賣つて暮してゐる此の頃の事だけに、泣いても泣き切れぬ思ひがした。が、契約を商人側から破る事は、商人としての德義に自分から泥を塗るやうなものだ。彼は泣きながら、默つて二臺を

納めた。丸三千圓を損した。

此の眞心が天地の神に通ぜぬ道理はない。東京乘合の石崎專務は暫く後に此の事を耳に入れ、今度は向ふから默つて突如、百臺の自動車を註文してくれたのである。躍り上つて石崎專務を訪ねた彼は、椅子に掛けた脚ががた〳〵鳴つて仕樣がなかつた。

資金のなかつた彼は、東京乘合からダイアモンド社に代金を直送してもらひ、自分は手數料を貰つてこれを更生の大事な資力とした。

誠實通じて浮かび上つてからの彼は、相も變らぬ毀譽褒貶の中で、日本の販賣權を確守する爲の努力や、車臺だけは國產としてエンヂンはダイアモンド社のを使用するといふ困難な交渉に成功したりした。

手を擴げて滿洲國の販賣權を握つてからは、すぐ千臺程を其の方面に賣飛し、陸續として押寄せる大口小口の註文に、事業はすつかり軌道に乘つた。其の後、

支那での販賣特權を買ひ占めるなど、彼の仕事は大陸へ大陸へと伸びて行つてゐる。

不遇と下積みに世をかこたねばならぬサラリーマンも、腕と肚とでは斯くも出世するものだといふ事を、快青年、屋代勝氏の半生は訓へてくれたのである。

横山公雄氏の巻

——横山工業株式會社——

目次

鑛山機械メーカーとして獨歩の地位
書生上りで石炭業に手を出し大損
二千圓で横山工業所を起す

鑛山機械メーカーとして獨歩の地位

ゴールド、金、ゴールド、金――、何度繰返して呟いてもちつとも倦きない。倦きないどころか、妙に胸がわく〳〵してくる。目を射るやうな金の色、ゴールドの山、堪らなくなつて思はず兩手を擴げ、

「美はしの、懷しの君よ」

と言つたとか言はぬとか、これは金山成金を夢みて探鑛に日夜を費してゐた一青年の事であるが、ゴールドが今日程燦然と光り輝いて「一旗組」の連中に無謀な夢を抱かしてゐる時代もない。

加ふるに政府の產金奬勵で、試掘願を申し出でる書類は實に日に數百通に及び、それが後を絶えずに束になつて次々と押し寄せてゐるのだから、怖いみた

いな話だ。こんな調子では日本中の山の中はおろか川の底から家屋の縁の下まで掘り返されてしまふだらうと、氣の小さいのはびくついてゐるとかゐないとか、兎も角、物凄まじい勢で年々の産金額が増加しつゝある事も事實である。

身を尖端に立たしめて金山發見に狂奔する夢多い人々を筆者は決して愚かしいなどとは考へない。寧ろ其の努力こそ第一線上の傷ましい姿であり、それあるが故に政府の産金奬勵も着々効を擧げつゝあるのだらうが、茲に一歩退いて、かういふ時代には又必ずや鑛山機械の需要も激しからうと其の製作に着眼、「夢」の裏を行つて遂に大成功をしたといふ行き方にも面白味があるではないか。

此の主人公は横山工業株式會社及び朝鮮機械製作所を牛耳る本年まだ四十二歳の青年紳士横山公雄氏である。氏は若い頃環境に恵まれなかつたので、何糞と事業欲を起した所逆に大失敗をした。止むを得ず一時サラリーマンとなつて

機會を待ち、時至れりと見るや僅々二千圓を振り出しに七ヶ年の短日月に今日を築いた正に立志傳中の傑物である。

横山工業會社及び朝鮮仁川に工場を持つ朝鮮機械製作所は此の方面の製作會社の少い我が國に、鑛山機械メーカーとして獨歩の地位を有し、共に三百萬圓の資本金を擁してゐるが、時流は更に増資の態勢を要求してゐる。

書生上りで石炭業に手を出し大損

横紙破りと稱される根津嘉一郎翁の邸に、まだ少年の域を出ない新參の書生が雇はれて來た。何を言ひつけてもおど〳〵してゐる所は、田舍出を明瞭に物語つてゐる。身體も餘り丈夫さうではない。慣れない仕事に疲れるのか、時に憐れつぽい目をして庭の梢をじつと見詰めてゐる事もある。

此の少年は當時の東京電燈副社長だつた河西豐太郎氏に連れられて、郷里甲府から上京した嘗ての横山公雄君だつた。彼は明治三十二年九月の生まれだが頭のいゝのを見込まれて、小學卒業間もなく河西氏の世話で根津邸入りとなつたのであつた。

此の田舍書生は身體こそ頑強とは言へなかつたが、甲州人特有の驚くべき精神力を持つてゐた。不完全ながらも言ひつけられた仕事は、やり遂げずにはおかない。

「横山、お前は何つて取得はないが、粘りだけは日本一だな」

邸の人からこんな事を言はれる位だつた。この粘りが一貫して行くところ、遂に今日を築き上げる原動力となつた。

今日横山工業株式會社の會長をしてゐる福島茂富氏も根津翁の書生だつた。共に翁にはぢやん〳〵こき使はれた。至難な仕事にぶつかると二人はよく根競

べをした。横山氏の方は根果てゝ涙さへ浮かべながら、それでも敗けたとは言はずに頑張つた。

人に雇はれて働くの辛さは、彼の心を愈々強いものに育て上げて行つた。一年ばかりで根津邸を辭し赤坂郵便局の通信事務補の職を得てから、彼は大倉商業に通學した。一日の激しい勞務の後に向かふ學校の机は、ともすれば睡魔のベットともなり兼ねなかつた。古人は睡眠を拂ふのに小刀を顎の下に立てた事を思ひ、何糞と疲れた目をかつと見開く事も數知れなかつた。

試練の神は、彼の上に更に苛酷な鞭を加へた。父をあの世に持つて行つてしまつた。妹を引取らねばならなかつた。

「妹と一緒に生活出來るんだもの、有難いではないか」

さう思つて自分自身を慰めた。が、薄暗い四疊半の間借りで營む兄妹の生活は、文字通り洗ふが如き赤貧だつた。どうあつても學校だけは卒業しなければ

ならぬと思ひ、三度の飯を二度にして、空腹を抱へながら教科書に向かつてゐた事もあつた。妹もよく斯かる兄を理解して、貧しい中にも鞭撻する事を忘れなかつた。

十八歳で大倉商業を卒業、大倉組の石炭部に入社して香港出張所詰となつてからの三年間は、苦しみ拔いて來た彼にして小春日和の如き觀があつた。折しも歐洲大戰最中の好況期で大倉組は躍進に躍進を續けてゐたので、此の中にあつて彼の大精神力はむく〳〵と新しい胎動をし始めた。卽ち、早くも「獨立」の計畫が芽生えたのである。

香港から歸國した大正八年、日本はまだ擧げて戰爭景氣に醉ひ痴れてゐた。そこで借金をして五萬圓程作り、獨力で石炭業に乘り出した。これが二十一歳の時である。

一攫千金成れる時を夢想して、「若い時に苦しんだから俺にも愈々運が向いてくるわい」とほくそ笑んだ。所が如何せん戰後の大反動が海嘯のやうに襲ひ來つた。それに石炭部勤めも僅々三ヶ年に過ぎないから、いざとなつて拾收の方途がつかない。五萬圓ベロリと損をして不況の風痛い世の中に投げ出された。

一時は呆然自失した。大變な事になつてしまつたと思つた。が、悲觀はしなかつた。彼には若さがあつた。其の若さに縋り着いて、再出發の機を摑む事にした。由來、志を立てゝそれを遂げた人達の多くは、一度は否一度と言はず三度も四度も再起不能の大失敗をしてゐる。然し、其の度毎に彼等の目は、敢て暗い方向に向く事をしない。そして、ほんの僅かでも錢されてゐる爪の先程の明るみ、それを發見するや猛然と再起の念を燃え立たせてゐる。横山氏には當時、殘されてゐる明るみは何一つとてない。たゞ一つ、「自分は若い」それを意識するや、其の若さを光明とし基點として立上がらうとするのであつた。

時機を待つべく、一先づ大倉組の子會社たる大島製鋼所に入社したのが、二

十六歳の時である。

二千圓で横山工業所を起す

大島製鋼所では入社當時は、會計係として働いた。だから、算盤と首引の何の變哲もない一介の月給取りであつた。身の廻りの人達も何の希望も持たず便々として其の日暮しをしてゐるのが多かつた。其の中で彼は密かに工場經營の實地を攝取した。そして七年間の大島製鋼所勤務は、機械工業に彼の心を寄せさせた。

七年目に大島製鋼所は赤字累積で身動きが取れなくなつた。彼は營業主任としての地位にあつたが、遂に製鋼所解散の悲運に遭ひ、三十三歳にして再びポイと社會の荒波に投げ出された。

彼は此の悲運をよく再出發の動機へと轉化させた。手元にある僅か二千圓の持ち金。だが、雌伏七年に及び研究の蓄積と、そこから發する度量があつた。時あたかも昭和六年、金輸出再禁止直前の不況のどん底であつたが、江東の大島町の一角に「横山工業所」なる看板を掲げた。

横山工業所は最初から鑛山機械の設計製作を業とした。彼が特に一般機械を取扱はずに鑛山機械のみを選んだのには考へがあつた。それは我が國には此の方面の專門工場といふのは殆ど無いと言つてもよい。然るに、當時の滿洲に於ける日本の利權は鑛業方面の開發に添ふて發展をしつゝあつたし、朝鮮に於ける埋藏資源も仲々有望な調査が進んでゐると聞く。鑛山機械製作は今後絶對に有利だと考へた。

然し、何を言つても元手はたつた二千圓である。それなのに尨大な鑛山機械の製作には相當の額を投じねばならない。鑛山機械には鑿岩機もあれば、其の

鑿岩機を動かす壓搾空氣用のポンプもある。俗に「マキ」といふ卷揚機もあれば、註文によつては坑内エレベーターも電動運搬機、送風機と言つたものまで製作しなければならない。資金が無い事とて、開業二ヶ年にして三百萬圓の借金を作つてしまつた。

今度は巨額の借金が出來ても驚かなかつた。間もなく滿洲事變となり、國防産業の擴充期が萌しつゝあつたからだ。

「借金は大きい程愉しいよ」

こんな冗談を言ひ乍らも、肚の底では持前の粘り性で粘らねばならぬぞと自重した。

軈て支那事變となり、果して鑛山熱は狂氣の如く事業欲ある人々を煽つた。前年の昭和十一年五月に資本金五十萬圓に改組してゐた横山工業所は、事變勃發の年には百五十萬圓となり、其の後更に三百萬圓に發展した。

昭和鑛業の森輝氏は個人的にも彼と親しい間柄だが、めき〳〵と育ち上つて行く彼の仕事振りを眺め、助力を與へて彼に朝鮮機械製作所を設けさせた。昭和十二年六月の事であつた。これも最初資本金五十萬圓から出發、次第に膨脹して今日の三百萬圓になつた。四萬餘坪の近代設備成れる仁川の大工場は、立上がつた朝鮮の鑛業界に應へて威容を誇つてゐる。

尙横山鑛業株式會社の本社建物は東京日比谷の一角に建築中であつたが今や竣成し近代的な見るからに明るい偉容を誇つてゐる。

芳澤鶴太郎氏の卷

—芳澤化機工業株式會社—

目次

屋根職人から商人へ轉向を志す
空鑵相場を左右させるまで
大正六年初めて鉛管製作に乘出す
六十歳から裸一貫の再出發

屋根職人から商人へ轉向を志す

郷誠之助の日本鉛管、古河電工、泉鉛管等、鉛管製作界の大所を向ふに廻し、確固不拔の位置を築き上げた工業界の中堅「羽黒山」級の存在に芳澤鶴太郎氏がゐる。省線龜戸驛を降り中川新橋で青バスを捨てると、すぐ目の前が芳澤化機工業株式會社の正門。これが資本金二百萬圓、鉛管製作に名を賣つて事變以來更に化學機械製作に進出、覇を唱へてゐる芳澤鶴太郎氏經營の工場だ。

所が愉快極まる事と言ふのは、彼は本年七十五歳の高齡だが、六十歳の所謂本家歸りに達した時には、無一文になつて地上に抛り出された。齡還曆と言へば、そろ〳〵耄碌境に入り込んで、手足の動きなどもどうやら緩漫になつて來るのが常道のところ、此の齡を迎へてがばつともう一度起上り、爾來、隆々た

る工業界の青春街道を歩調華かに歩いて來たと言ふんだから、怖るべき羨しさだ。由來、職人の家に生まれて苦しんで來たゞけに、老境に入つて無一文になつたところで今更女々しくなるのも考へ物だが、それにしても彼の何處にこんな見えざる偉大なる力が備はつてゐるのであらう。筆者は一日氏に面接して、親しくその體驗談を聽く事を得た。

「あたしには學歴がありません。人は嘘だらうと言ふのですが、本當にあたしは小學校へも上らなかつたのです」

と語り出す聲は、人生の裏表をよく識り拔いた好ましい悠揚さの中に、人を惹きつける和氣を漂はせる。

江戸の神田に生まれたのが慶應元年、父親と共に京橋桶町に住んだ。彼は「金を費ふ爲に事業をする」と言ふ事を說くが、「宵越の金は使はぬ」此の江戸つ兒氣質は、幼い頃から兩親に承け繼いだものだ。

「あたしの家は屋根職人で、あたしも屋根を葺いてゐたのです」

と、恬淡たる老紳士は續けて語る。あたしといふのは彼の獨特の口調で、もの柔い響きを人に與へるが、此のあたしも小さい頃、恐らく父親の手傳ひで屋根を葺いてゐた頃から使つてゐたものではないか知らと、言葉のそんな端々にも親しみが湧く。

屋根職としては彼の家は頭梁格であつた文字は姓名を記るせば足ると言ふ當時の職人氣質は、無學を恥ぢず、社會的向上心を特たぬ弊風の中にあつた。

「職人生活から足を洗ひたい」

これが若い彼の胸に蠢動として起つた最初の希望である。だが、職人生活から足を洗ふ事になれば、無學のまゝではどうともならない。勉强をしなければならぬとは思ふものゝ、その頃より父親の飲酒が愈々深まり、家運が傾いて來た。十六歳の年少の身で、彼は一家の一切を切廻さねばならぬ運命を脊負つて

ゐた。こんなわけで、コツ〳〵と獨學に入る事の出來たのは、二十歳位からの事である。彼が自分の計畫に對して「粘り」を捨てない事は、還暦から再出發して遂に榮冠を射當てた事に徵しても判るが、若い頃の獨學にも現れてゐるではないか。

二十五歳、頑固な父親に死別。彼は全く獨り立ちになるや、愈々商人への轉向を實現させる機會を狙つてゐた。

火事は江戸の華と言ふ。明治初期の東京には殊に火事が多く、火事のある度に人々は「景氣がいゝ」と言つて喜んだとか嘘のやうな話もあつたが、そんな爲もあつてか、建築樣式が次第に變つてきた。卽ち、在來の燃え易いコケラ屋根からブリキ屋根、瓦屋根等が出現し、夫等はそれこそ火の粉のやうに增え擴がつて行つた。同時に彼はブリキ屋根職となつて、樋、煙突等も扱つて暮してゐたが、更に——。

空鑵相場を左右させるまで

明治三十年だ。臍を堅めて、先づ家財道具を賣拂つた。辛じて算段した尊い五十圓。掌に乘せた札ビラを見詰めてゐると、泣きたい程緊張してくる。無理からぬ事だ。これがそもそも彼の事業界へのスタートであつたのだから。店も神田南鍛冶町に間口三間の家を家賃五圓で借り受けた。日淸戰爭直後の事とて日本躍進の好時期だ。仕事はブリキ板の販賣業。

當時の屋根用のブリキ板といふのは、石油の空鑵を潰した言はゞ廢物利用であつた。始めての轉業であるから、彼も懸命に働いた。さうかうする中に次第に商賣の道に通じてくる。通じれば一層面白くなる。時には小さな蹉跌も待つてゐないわけではなかつたが、そんな事で意氣が挫けてなるものか。家財まで

賣拂つた背水の陣だもの。

所が、其の同じ石油空罐をそのまゝ賣買して巨利を得てゐる新しい事實を發見して、彼はびつくりした。卽ち、石油空罐は魚油植物油等の容器として次第に需要を增しつゝあり、淺野總一郎氏經營の淺野タンク石油の如き、大活躍をしてゐたのである。

「自分も亦一轉すべし」

大いに事情に通じてきてゐる事とて、直ちに京橋寶町に石油容器販賣業を創業した。これは大いに當つた。爾來、歐洲大戰直後の大ガラを喰ふまでは事業は次第に發展を重ね、販賣のみでなく製造にも乘出し、これが又々當る。遂には神田を始めとして芝、深川、淺草、横濱其の他合せて七地方に支店を設け、

「空罐王の芳澤鶴太郎」

と稱されるまでに至つた。その名は上海にまで聞え、空罐相場を左右する力を持つてゐた。

「あたしは晩婚で三十五六まで一人で居ました。事業を行ふのに、早く妻帶する事は私のやうに一人の母親の外には身寄りのない者にとつては重荷であり、却つて不便だつたからです」

と、老いたる彼は昔を回顧しながら語るのであつた。

大正六年初めて鉛管製作に乘出す

話はそれより少し古く戻つて明治四十年頃、或知り合ひの輸入業者の奬めにより、もう一つの新しい事業に乘出すべく準備を進めた。彼が最後に今日の成功を見るに至る鉛管製作事業である。當時、日本鉛管が芝の三田にあり、鄕誠之助氏がこれに采配を振つてゐたが、鉛管製作と言ふのは後にも前にもたつた

これ一軒で、全く獨占の素晴しさにあつた。彼の知己はこれを見て、大いに此の方面が今後開拓されねばならぬ事を說いた。彼の氣持も亦、動いた。

そこで大正六年になつて、英吉利から機械を輸入し、資本金三十萬圓の東洋鉛管株式會社の創設となつた。三分の二以上の株式を彼が引請けた事は說明するまでもあるまい。前述のやうに、當時の事は容鑵王として一方の名聲を馳せてゐたのだから、彼の事業軌道もそろ〳〵思ふ壺に塡るかに見えた。

「あたしは衣食住に趣味が無い。藝妓をあげても別莊を持つてもそんな事は面白くない。自分に欲望といふものが少いのです。ですから財を子孫に殘すといふ氣もないのです。私の趣味としてはたゞ自分の處で働いてゐる人間が段々生活的にも人間的にも向上して行くのを見る事、それだけが樂しみです」

と語る彼の言葉は、まんざら單なるセリフではなさゝうだ。事業經營の根本精神は昔も今も變らない。

偖、彼が初めて手を出した鉛管事業は如何なつたか。失敗したのである。無一文になつて地上に拋り出されたのである。といふのは、その頃は既に競爭者續出の傾向にあつて、利無く、加へて機械輸入に立替へた現金は莫大な額に上り、手形の支拂ひに追はれる始末となつてしまつた。

「獨立獨歩の解決あるのみ」

飽まで獨立獨歩、借金負債を一切排して少しも泣言を並べなかつたといふのは、幼少の頃より養はれた不羈の精神の然らしめた所か。

續いて、大正九年のパニックだ。此の大嵐は彼の石油容器事業をも搔き拂ひ、全國的な支店の引上げを行ふべく餘儀なくされた。それも又止むなし。其の損害五十萬圓と見積られた。

一方、鉛管の方も彼はやめる意志で社長を辭し平重役となつたが、他方、此の壞滅であるから當分は專ら自宅に引込み、閑居といふ事に決めた。既に東京

市内の舊出張所の大半は貸家として月々三千圓の收入を擧げてゐたので、それを賴りにするとは移りに移る時勢ではある。

然るに、間もなく大切な其の收入も丸潰れとなつた。大正十二年の關東大震災が一嘗めにしたのである。時に六十歳だ。彼は生活にも困る破目に陷つた。

六十歳から裸一貫の再出發

六十歳で裸一貫、だが少しも悲觀はしない。六十歳は本家歸りと言つて元に歸る事を意味するのだもの、昔の裸一貫になつた氣持で再起してみよう。かう考へた。將に彼の本領である。倖ひ、神戸に二千坪の土地が殘つてゐた。これを處分して資金とし、鉛管事業への再出發を試みた。

大正十三年、再出發の東洋鉛管は重役間の意見一致を見ず、ともすれば引込

思案が優勢になる。かうなれば最後的手段は一つあるのみ。曩の他人名儀拂込株は三分の一だ。これを全部買戻して彼一手に收める事。

斯くして名實共に「芳澤鉛管」としてのスタートが切られた。鉛板機械は獨逸より輸入する。大阪へ支店を出す。着々業績は恢復して昭和十二年の事變景氣に當面した。茲に一躍四倍の百二十萬圓增資を斷行、更に翌十三年にはアルミ輕金屬加工により一般化學機械の製作にも乘出す事となり、五百萬圓增資を目論んだが、資金調整法の爲認可成らず、二百萬圓までの增資にとゞめ、一方「芳澤鉛管」から「芳澤化機工業」と改稱した。從業者六百人餘、現在工場建坪五千坪、更に第二第三第四工場を建設中で、軍需部門への進出も必至と見られてゐる。支店も朝鮮及び滿洲に有り、大連及び奉天には仔會社を設立中である。

彼は最後に次のやうに話を結んだ。

「たから、あたしの事業に對する氣持は金を儲ける爲に事業をするのでなく、金を費ふ爲に事業をする。事業の爲に人を使ふのでなく、人を用ふる爲に事業を營むのです。人を多く用ひ經費を澤山費ふといふ事も、國家へ盡くす道であると、あたし流に考へてゐます。前には一萬圓程度のが現在は十萬圓程も毎月費つてゐます。そんなわけで、あたしの會社には一切秘密主義がなく、營業利益も公開し、共に働き共に愉しむといふ氣分ですから、心にいつも安定があります」

吉野岳三氏の巻

——川島屋證券株式會社——

目次

相場が投資本位になつてきたので
三十代で常務になつた彼の「頭」
運命の奔弄を乘り切つて

相場が投資本位になつてきたので

「兜町に詰めてます」と言ふと「ホオ、それはお忙しい事でせうナ」と人は答へる。そして必ず「大分お出來になつたでせうが」と續けて言ふ。お出來とは財産が出來た事の意味である。

所が「いや、取引所の調査部の方ですよ」と言ふと「ははあ、それは又お骨の折れます事で」と答へ、此の場合はお出來とは決して言はない。それ程、兜町の調査部詰といふのは華々しくないぢみな仕事なのである。

兜町と言へば眼の廻る忙しい事の現代的な代名詞の感があるが、それは飽くまで「儲け」と結びついて考へられる事であつて、儲けずに眼だけ廻してゐるなんて一寸、兜町らしくない。調査部といふのはそんな所なのである。だから、

調査部詰から重役が出るなんて、まあ、考へられない事であつた。

それが出た。先づ、野村證券の調査部長だつた飯田清三氏が重役陣に飛上り、大阪商事でも調査部長だつた杉山義夫氏が重役の椅子に着いた。そして吉野岳三氏も亦、資本金七百萬圓の株式會社川島屋の調査部長から常務取締役になつた。調査部からでも重役になれる。此の新しい現象は果して日蔭者に惠まれた偶然の幸運であつたらうか。いや、そんなものではない。

從來、相場は投機が中心に動いてゐたものだ。それが矢張り時代的投影の現はれとして、投機から投資本位になつてきた。言はゞ、運を狙はずに頭で行かねばならぬ事になつて來たのである。茲に於て、取引所の調査部の地位が非常に力あるものとなつてきた。頭で押す爲には如何しても調査といふやうな體系的な仕事が重要だ。運の相場から頭の相場へ。斯くて氏の重役陣への登場は、必然にこれを要求されたのである。

三十代で常務になつた彼の「頭」

「頭」を買はれて輝かしき常務に押し上げられた氏は、川島屋に入つて十五年徹頭徹尾「頭」で闘つて來た。一つ橋出身といふ學歴が彼の頭に一際磨きをかけた事も否めないが、彼は財政經濟に關しては一かどの學者でもある。だから取引店入りの最初から、調査部で究理的な頭腦をふるつて來たものだ。

それに兜町切つての利け者である遠山元一氏が社長であるから、彼も上にいい人を持ち思ふ存分の手腕を發揮する事が出來た。川島屋は最初資本金三百萬圓の株式會社であつたが、個人的色彩が著しく濃厚であつた、然し個人式經營の近代組織化といふ事なしに、これからの發展はあり得ない事を彼は痛切に感じてゐたので、社長を說き、着々と經營の近代化に努力を傾倒した。

彼の提唱した改組案は、見事に川島屋の新しき發展の基礎となつた。新進中の新進として川島屋は一歩一歩搖ぎなき地盤を築き上げ、遂に七百萬圓の大會社に發展、今日では川島屋證券、滿洲川島屋證券の兩社を姉妹會社とし、文字通り一流證券會社にのし上つてしまつた。

こゝに至れば、彼は社長代行であつた。遠山氏も心を安んじて、彼の頭に任せる事が出來た。彼は四十の聲を聞く前に、既に常務の地位を得たのである。

運命の奔弄を乘り切つて

中學を卒業するといふ年に、彼は古河鑛業大阪支店に勤務してゐた嚴父に既に逝かれ、それから次々に繰展げられる運命は決して彼に恵み多いものではなかつた。

大正八年に商大を卒業してから、今の川島屋に入店するまでに彼は三ヶ所勤めを移つてゐる。古河鑛業、それから三越、其の後に或土木會社に入つてゐる。

卒業と同時に在學中經費を受けた關係上、古河商事に入つたが、これが一年に滿たぬ中に退職の餘儀なきに至つてゐる。それは歐洲大戰終結直後に來た大恐慌の爲、古河も入社滿一年未滿の者を全部退社といふ大々的整理の犠牲の一人となつたからである。これから事を成さんとする若い青年サラリーマンの青い芽に、餘りに大きい驚きではあつたが、止むを得なかつた。中學時代より苦勞をして來てゐるだけに、別に落膽はしなかつた。

三越では最初の三年間を仕入部で働いた。その頃よりデパートの仕入といふ仕事が自分とそりの合はない事を感じてゐたが、震災後青山分店詰になるや、一層其の氣持は長じて行つた。無論、器が小さいとか仕事そのものに意義がないなど言ふのではない。もつともつと、頭を第一にする所、冴えた腕を存分に

ふるへる場所が欲しかつた。つまり、緻密な頭腦を必要とする學究的思索の上で仕事がしたいと思つたのは、彼にして無理からぬ事であつた。

三越から身を引いて、新たに入社したのが土木會社。當時は帝都復興の頂上にあつたから、一攫千金を夢みて土木會社が無數に增えたものだ。知らずに入社した其の會社も御多聞に洩れず、サラリーマンが神と賴む月給が貰へない。これには困つた。學生時代に尊い友情の援けを受けて來てゐるだけこんな事ではならぬと深く思つた。そして或人の世話で、川島屋入りとなつたのであつた。

氏は本年四十三歳。薄倖の運命の風に弄ばれて來た隱れた秀才にも、遂に咲くべき花は咲いたのである。氏は又、クリスチャンとして深い信仰を持つてゐるから、飽くまで端正そのものである。社長の遠山氏が同じく基督教を通して强い宗教心を持つてゐる點から、遠山社長吉野常務の組合せは人も羨む兜町の話題でなければならぬ。

米澤勇作氏の巻

——富士見機械工業株式會社——

目次

一　儲けのない椽の下の力持
　創業の苦難
　華々しき門出
一　夫人の内助の功

儲けのない椽の下の力持

彼は如何に儲けたかとか又は如何に事業を擴大したかとかいふ事になると、茲に語らんとする富士見機械工業株式會社々長の米澤勇作氏を其の列中に置くには躊躇しなければなるまい。彼だとて無論儲けもしたし大きくもなつた。が、其の意味での苦勞なら、例を他に求める事は幾らでも出來る。我が米澤勇作氏の本領はもつと別な、そして同時にもつと高い所にある。

少くとも一國の工業を發達させる爲には蓄財も必要であらうし一社一社の擴張も必要であらう。だから其の爲に辛苦多い道を敢て拓く事は言ふまでもなく尊い。だが、目先の儲けにもならぬ、仕事の急速な擴張にもならぬ、然し、それ無くしては絶對的に工業界總體として發展は望み得ないものがあると考へ

て、一文の得にもならぬ事を着々と計畫し、遂に實行した事も尊いではないか。其の主は米澤勇作氏である。

氏は豫ねてから痛感してゐた中小工場徒弟教育の必要を具現し、其の爲の學校を同憂の人々と協力して全國に魁けて創設したのである。大工場では强制設置としての青年學校もあり、旁技術指導も進められてゐるのに反し、中小工場の徒弟は放り出された儘でゐる。これを捨て置いては、中小工場の將來の地位にも直接關係して來る。一方、徒弟個人の身として考へても再教育される事の幸福は言ふまでもない。斯く信じた氏は率先して同志に圖り遂に今日の學校創立となつたのである。全く一文の儲けもない椽の下の仕事——だが、これが將來どんな大きい力になつて還つて來るかは易々と豫斷は出來ないものがあらう。中小工業界の先覺者として氏も亦、普通とは違つた意味に於て第一線の人でなければならぬ。

徒弟教育を何とかしなければならぬといふ考へは、彼自身の仕事の經營上に於て度々抱かさせられてきた事だつた。それは彼が藏前高工の機械科の出身であるので、高い技術家としての眼に映じた當然の要求でもあつた。

今の大森三丁目に彼が最初の機械製作業を開始したのは、大正十四年である。彼は靜岡縣に明治二十年に產聲を擧げたのだから、當時三十九歳であつた。

當時の大森は今のやうに中小工場が軒を並べてゐるのとは丸で趣を異にし、空地もあれば原つぱもあるといふ具合。其の中で日本特殊鋼管、瓦斯電等の二、三の大工場が天下を我物顏にぽつん〳〵と建つてゐたに過ぎなかつた。其處に出來た五十坪に過ぎない富士見製作所の貧しさ——だが彼は抑々うんと大きくなつてやらうと無謀な企みも持たなければ、巨萬の富を積んでやるぞといふ夢にも餘り興味を抱かなかつた。たゞ着々として、いゝ子弟を作りたい、子弟と共に心豐かな生活をしたいと、それを念としてゐたのである。

創業の苦難

當時の氏は恐らく氏の一生を通じて最大の艱難を嘗めたとも言ひ得られる。大正の末、昭和の初頭といへば、正に彼の歴史的な大恐慌がその巨口を開かんとしつゝある時であつた。デフレーションに次ぐデフレーション、街には「緊縮小唄」といふ様なフザケた小唄が流行する位凄じい不景氣であつた。五圓、拾圓といふ様な今の軍需景氣から見ると嘘の様な小額の仕事をも、難有くお受けせねばならない時代であつた。冗費の節約、出來るだけ無駄な費用は切りつめ様として、氏自身がリヤカーを押してお得意まはりをし、その五圓、拾圓といふ小額の仕事をとつてあるいたものである。氏は獨立して開業するまでは、横須賀海軍工廠、東京瓦斯、新潟鐵工等の錚々たる大工業會社の技師であつた、

それが今汚れた仕事着を着て、リヤカーを押して歩く——おまけに當時の大森界隈は今の様な立派な道路がなく、始んど野つ原同然で、それが又雨が降ると泥沼の様になつた。その泥沼の様な道を、頭から泥ンコになり乍らリヤカーを押してゐる氏を見て、近所の人でさへも、かなり長い間「富士見さんの所の職工さんはよく働らく」と噂して、一向に主人だといふ事を知らなかつたといふ。

根限り力の限り働らいて、それで月末になれば赤字の出る事は一再でなかつた。氏の夫人は氏にかくれて質屋の暖簾を何度くゞつたか知れない。夫人は筆者にその當時の事を語つて

「そりや、お話にならない程苦しい時代でした。でも今になつて考へて見ますと、むしろ感謝したくなります。あんな苦しい時代を通り抜けたお蔭で、この頃の物資不足時代にも他人様程、不平をこぼさずにやつて行けます。どん底生活をして見ますと始めて色々な事が解つて參ります。人情の美しさも、他人に

はどうしなければならないかといふ様な事も本當に解つて參ります。主人の申す職工さんの人格教育といふ様な事を本當に理解して協力して行けますのも、當時色々苦しんだおかげだと存じてをります」と言はれた。

氏は極はめて實直な地味な性質である。はでな事やケレンが大嫌ひで何でも固く固く、一歩一歩築いて行くといふ風である。從つて仕事は非常に地味であつた、それだけに大穴をあけるといふ様な事もなかつたが、儲けといふ程の儲けは殆んどなかつた。

「子弟に迷惑を掛けたくない」

先づ頭に來るものは何時もそれだつた。

迷惑を掛けたくないといふ事は、心を安んじ得る境地に置いて、優れた子弟に育て上げたいといふ事であつた。優れた子弟とは——。彼が最も強く要求するものは「人格」であつた。

技術家の彼が子弟に對して技術を第一に求めず、人物を要求するとは如何いふ事であらう。それは技術の眞の成長は人格の練磨を措いては遂げられないからであつた。

今假りに此處に人物としては劣等でしかないが、技術に或程度長じてゐる職工がゐるとする。其の職工は果して習得したゞけの技術を常々十分に使驅し得るであらうか。人物として出來てゐなければ、怠け心も起るであらう。胡魔化し心も起るであらう。そんな心から果してどれだけの立派な製品が出來上るであらうか。

然るに、其の逆に技術はさう高くなくとも、人物的に完成してゐれば、眞心で仕事に打當る。勵みもある。研究心も起す。結局、出來上つた製品は後者に勝を占められる事になるのである。

だから、二人の職工があつて、Aは技術甲人物乙、Bは技術乙人物甲といふ

場合に、私は遠慮なくBを採りますと彼は言ふ。いゝ徒弟の養成とは優れた人格を磨く事だとして、彼が古くからそこに心掛けて熄まなかつたのは、そんなわけからであつた。

こうしてゐる間に、不況の波は益々ひどくなつて來て彼の工場は一時全たく動きがとれなくなつてしまつた。技術家として一定の名聲を保つてゐた彼の事だから、工場を閉鎖しても彼を喜んで迎へてくれる會社は幾つもあつた。家族の爲には寧ろ其の方が安泰の道であつた。一生の身の振り方を決する時機に迫られてゐた。

「自分達の住んでゐる此の屋敷を賣らう」

流石に聲は重かつた。

その彼の言葉を引つたくる様にして夫人が言つた。

「それが宜しう御座いませう。私もさう思つてをりました。お仕事のためならば、どんな犧牲も覺悟してをります、損得では御座いません。やりかけた事はどんな事をしてもお續けにならねばいけません」

夫人のこの言葉はどれ程彼をはげましたか知れない。こゝにおいて夫妻協力、艱難突破のつよい意志を固めたのである、工場を繼續して大きい儲けが欲しい爲ではない。育て上げた徒弟を今更手離すに忍び難かつたのだつた。そして、身は貧しくとも本當の徒弟教育を擴大しなければならぬ義務を思ふのであつた。

華々しき門出

徒弟教育の組織化に着手したのは、支那事變の直後であつた、彼は以前から、大森區内の中小工業者の親睦團體たる大森機械工業同志會を、武井氏（武井工

業所）大塚氏（大塚鐵工所）馬場氏（城南製作所）鬼頭氏（鬼頭製作所）其他の有志諸氏と共に組織し、時々會合して會員相互の親睦を圖りつゝあつたが席上誰れ言ふともなく「徒弟教育」の組織化問題の出ることがしばしばであつた。たまたま同同志會において其の下心あるを知つた日本技術教育協會では、「これを機會に一つ職工の學校をつくつたら」と話を向けて來た。もとよりその機運は熟してゐた事とて會の方にも異議はない、善はいそげといふもので、多年職工教育に就いて研究をしてゐた氏を中心に具體案が急速にすゝんで來た。

ところが、その反響は意想外に大きく此の學校案を耳にした協調會、工場協會等は大いに賛意を表し、進んで後援を申し出た、かうなれば仕事にはづみがついて來る。斯くてトン〳〵拍子に事が運んで、大森機械工業徒弟學校は、昭和十四年四月十五日に華々しい始業式をあげるに至つた。

創立費に貳拾五萬圓充てた。本校舍は建築中だつたので、大森警察署の特別

の計らひで出來上るまで大森第二小學校を假校舍として使用する事にしたが、これによつて組合傘下の徒弟六百餘名が、心たのしく學問にいそしむ事が出來る様になつた。

一日筆者は氏を訪れ、喜こびの言葉を述べたところ

「いや他人様からほめられる様なものではないのです。ホンの緒についたといふだけの事で、内容もまだ殆んど充實してをりません。これから追々充實もさせ、發展もさせ様と考へてゐるのですから、その御つもりで一つ長い眼で見て下さい。又、この仕事を始めるに就いて一部には米澤一人でやつた様にあやまつて傳へられてますが、微力な私一人で何が出來るものですか。組合員の方々や、厚生省其他の大きな御力添えがあればこそ出來たのです、こゝのところをよく御認識下さい」

どこまでも地味な宣傳ぎらひの氏は、筆者の喜こびの言葉に對して、むしろ

非常に迷惑さうにかういつた。

だが、古色をおびた町工場「富士見製作所」で、多年默々と金にもならぬ大理想のために椽の下の力持として闘かつて來た米澤氏なればこそ、晴れて六百人の新らしい徒弟の、親しい校長さんに推されたのである。踏まれても根づよくしのぶ道草の、やがて花咲く春も來ぬべし、氏の多年の力闘が今報ひられて、咲く花が咲いたのではなからうか。

そして其の花こそ百萬儲けたの五百萬儲けたのといふ事より、どんなに清純な大きい實を結ぶ事であらう。國民的人格の養成に主眼を置いて、技術遍重の排撃、人物主義の徹底に邁進してゐる五十三歳の校長さんの手から、今後の工業界にどんな新人が羽搏いて出るか、これは決して淡い夢ではなささうだ。

夫人の内助の功

最後に氏が「今日を築くまで」の蔭には、夫人の並々ならない内助の力のある事を逸してならない。夫人はその苦境時代、仕事に沒頭してゐる氏に臺所の事まで心配かけたくはないといつて、ひそかに質屋の暖簾をくぐつた事も一再でない。どんなに苦しくとも、どんなにつらくとも愚痴一つこぼした事のない氣丈な婦人である。ある時は氏のために姉ともなり、母ともなり、多難な氏の仕事に協力して來た。昨年滿洲で技術者大會が開かれた時、夫人はすゝんで之れに參加し、足弱の女の身乍ら男の技術者に伍して、各所の工場を見學して來た、夫人は滿洲の工業狀態を視察して、日本の工業の有つ使命を强く痛感し、と共に今更乍らその中心を爲す「職工」の素質向上の必要を深く感じたといはれてゐる。

ある意味において米澤氏の今日は、夫人の力に負ふところともいはれやう。

米澤勇作氏の巻

「今日を築くまで」終

昭和十五年四月十日印刷
昭和十五年四月十五日發行

立志奮闘傳

定價 二圓八十錢

著者 東海出版社編

發行者 山崎一芳
東京市芝區田村町五ノ七

印刷者 福山威之助
東京市牛込區西五軒町三十四

東京市芝區田村町五ノ七
發行所 東海出版社
電話芝一四五二・二六五六番
振替東京七五四六番

（福山印刷製本）

東海出版社刊

東京市芝區田村町五ノ七
振替東京七五四六番

木原通雄著	現代政治の危機	四六判 二二三頁	一・二〇
後藤勇著	ソ聯極東軍は何を狙つてゐるか?	四六判 二六〇頁	一・三〇
ミュドルハムメル著 池田林儀・山口廣譯	皇民の書	四六判 一九二頁	・八〇
武藤貞一著	久原房之助	四六判 二二〇頁	二・五〇
山崎一芳著	詩集 大行颪	新四六判 二三〇頁	一・〇〇

北支派遣井關部隊
手塚尹著

山崎書店刊

東京市芝區田村町五ノ七
振替東京六二三四一番

神崎清著	女學校ものがたり	四六判 三〇〇頁	一・五〇
草島時雨著	一高時代	四六判 三二〇頁	一・三〇

終